

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号
第二十九号

遺族・吉田薩子さんの その後

四人住まい

三池縫製は、三川鉾大爆発で犠牲となった労働者の遺族の、生活対策のため、三井が地元を誘致した工場。ここで働く遺族の一人に吉田薩子さんがいる。

おつとをひいて、ひかえめ、いつも優しい表情をみせるが、彼女も、もう四十四歳。あといまは三十三歳だったのに、と思えば、未亡人として生き抜いてきた過去十二年間の歳月が、すしと重く感じられてくる。

二人の男の子がいる。あといま五歳だった長男光博君が十六歳で高校一年。進学熱に燃えているのを見え、机にかじりつく毎日。次男昭彦君は、まだ二歳に過ぎなかつたあの日。いまは十三歳で中学一年。いつのころからか、朝起き、洗顔をすますと必ず仏前に座り、いっしんに手を合わせるようになった。

薩子さんは、その見守りながら、いつか、「きつと、勉強ができるようにお守りください」といふ気持ちから「う」と、ニコニコ



吉田の真実を写真に写す。吉田真実(左)と、妻の薩子(右)と、二人の子供たち。写真上は元気の吉田真実(左)と、妻の薩子(右)と、二人の子供たち。写真下は元気の吉田真実(左)と、妻の薩子(右)と、二人の子供たち。



はじけ飛んだ将来の夢

今は、勤めから帰ってまた内職

母親の思い響け、とどろけ

片田舎から

武重さんは坑内機械工。三川鉾大斜坑道の、ヘルト当番だった。三十二年六月七日長男光博君が、三十六年七月二十九日次男昭彦君が誕生。二人の生活は、何となく過ぎていった。

もとも、結婚後二年めの昭和三十五年、一家は、いやな三池闘争に巻き込まれていった。でも住まいの場所が場所だったから、薩子さんとしてはただ良人の身を安するばかりで、デモに行くこともなく、まるでまごころのようだった。

おつと、おつとくがある。あの爆発のほつれにひびく仰天。出勤していた夫の身を気づか

相次ぐ不幸

武重さんの一家は、いまサハラと呼ばれる極太からのひき揚げ。それも太平洋戦争がおわってから三年めのことだった。一家が向うに渡ったのは、三井鉾山の職員だった父親一さんが、当時三井が、彼の地で経営していた炭鉱へ転勤したため。その後、武重さんの一番うその

はじけた夢

冷たい遺体が、わが家に帰って来たのは、もう、爆発後三日めの十日。

爆風で、したたか炭壁にたたきつけられてもいたが、武重さんの頭部は形を残さないうちに、無惨にうち砕かれていた。

薩子さんは、亡夫武重さんの遺体を見てはいない。いや、見せてもらえなかったのだ。

彼女の思考力は、完全にかすんだ。その日から十五日め、同月二十四日、市内の笹林公園に自黒の服を着てはらめくらし、三池労組の手で盛大に営まれた組合葬に、薩子さんは父親一さんと二人で参列した。身のまわりのことが、再び記憶にとどまるようになったのは、そのとき以後のことである。

それでも、三池縫製が操業を開始すると、ほかの遺族とともにさっそく勤めへ。動力ミシンを使っていた、フロンカバの重ね縫い、薩子さんに与えられた仕事。いまもかわっていない。

作業量は、一日にほぼ千枚。賃金は、総かせぎ額五万九千七百九十二円也(六月分の実績)。これとて、残業手当の五千三百円や満勤手当の三千円、それに出動日だけにかかり、三井鉾山がしるしをだしてくれている生活補給金の二万三千円(一日五百円)などを加算してのこと。

思いよ響け

「とにかく、のぞみは、遺族の身で、思いあがったようにもどられましようけど、主人から託されました二人の子どもを、伸びるだけ伸ばしてやりたい。ただ、この思いは、おつとです」

薩子さんが語れば、それに重ねて薩子さんの母も「とにかく、二人ともはまっとうにまっとうな、ハイ」。

折り返すにはいられない。母親薩子さんと祖母おつとさんの切なるこの思いが、光博君と昭彦君きょうだいの胸に響け、とどろけ、と。

おことわり

原告団の、特集号、の番号が、一冊飛んでいました。従って今号から訂正致します。ごめいわくをかけた。おわび致します。

もう一人、家族に養母のみどりさんがいる。七十二歳。こがらな体躯とは逆に、かくしやくとしていて、文字通り一家の見かめ役。

住まひは、大牟田市諏訪町三丁目五十五番地。亡夫の実父一さんが入手した家で、間数も多く、そして広い。

一さんは、職員として三川鉾での勤めを最後に退職。六十九歳で世を去った。昭和四十四年のことである。

縁は不思議

亡夫の名は武重さん。六人きょうだいのなかで三番めだった。

薩子さんは、吉田さん宅のそばに住んでいた実の叔母から、「入間がまじめだから」とすすめられ武重さんと結ばれた。縁とは不思議なものだ。

昭和三十三年四月十九日結婚。武重さんが一月七日、薩子さんが三月二十二日とその月日こそ違え、ともに昭和五年生れたから、結婚は同じ二十六歳のとき。

新婚旅行は雲仙だった。たつたひと晩過ぎただけの、あわたたしい旅行だったが、「これからだし、機会はいつでもある。子どもでもできたら、またゆくりきよまらないうね」。思い出の夜響てくれた武重さんの言葉が、いまも薩子さんの耳の奥に響きついている。

彼女は、「夫婦だけの旅行は、あともさきにも、このとききりになってしまりました」と。そう語る時、彼女の胸のなかでは、くやしきとも、怒りともつかぬ複雑な思いが、渦をまいていくことだろう。

彼女はいり、夫婦だけの旅行は、あともさきにも、このとききりになってしまりました」と。そう語る時、彼女の胸のなかでは、くやしきとも、怒りともつかぬ複雑な思いが、渦をまいていくことだろう。

彼女はいり、夫婦だけの旅行は、あともさきにも、このとききりになってしまりました」と。そう語る時、彼女の胸のなかでは、くやしきとも、怒りともつかぬ複雑な思いが、渦をまいていくことだろう。